

学位論文の要旨	
氏名	韓 霖
学位論文題目	「定住化」政策下における青海省チベット族遊牧社会の文化変容に関する考察
<p>本論文の目的は、青海省におけるチベット族遊牧社会の3つの定住地(村)の事例から、定住化による市場経済の受容に加え、生活・生産及び社会的環境と経済領域の変化という大きなうねりの中で、遊牧社会の文化的変容の実態を明らかにし、その諸要因を考察することにある。内容としては、主に牧民の日常生活に焦点を当て、そこで草地の有無およびあり方に深く関係する産業形態、衣食と家畜、婚姻・家族などの視点を取り上げ、変容の実態を明らかにする。ただし、それは、単に定住前と定住後の比較にとどまらず、さらに定住タイプの違いにおける文化変容の差異を解明し、その要因を明らかにすることも含まれる。</p> <p>次に、本論の構成は、先行研究と本論の目的・調査研究方法について述べた序論と結論の他に6章からなる。各章の内容は以下ようになる。</p> <p>第1章では、政府の定住化政策のメカニズムと、そこに牧民の伝統的な遊牧文化がいかに関与しているのかを検討した。そもそも環境問題と貧困問題の解消という目標を達成するため立案された定住化政策において、政府はインフラ整備を中心に産業形態の変革、いわば近代化・市場経済化を推進しているが、牧民の日常生活や生産方式に基づいた伝統的遊牧文化が変容あるいは喪失という事態に直面しているという側面については、ほとんど問題視されていないということを指摘した。</p> <p>第2章では、3つの定住地の比較から、これまでの生産方式、草地のあり方とその自然条件に密接に関係する生産組織および牧民の社会的関係の変容について考察した。伝統的な生産組織の存続は、草地の利用あるいは草地での生活や生産活動の存続が前提となっているが、現在の牧民の社会的変容の要因は、単なる草地の利用における変化に限られるものではなく、地理・気候という生活環境の変化と、市場経済下におかれた経済的貧困などの要因も含まれる複合的な結果であることを明らかにした。</p> <p>第3章では、草地利用の変化に伴う家畜飼養の変化に関して、3つの村における比較から、家畜の構成や管理方法の変容とその違いを明らかにした上で、草地利用の変化に加え、牧民の食生活の変容における差異とその要因について考察した。定住化に伴う家畜の数や</p>	

種類の減少は、従来の家畜の構成や管理等の生産様式に様々な影響を与えた一方、伝統的な食生活にも大きな変化をもたらした。ただし、それらの変容を招来した原因は、単なる家畜の存在と多少に限られることなく、草地での生活様式が存続しているか否かに深く関係しており、それは、たとえ季節的放牧であっても存続の必須条件となっていることを明らかにした。

第4章では、2章と3章の変容に基づいた牧民の婚姻と家族構成の変容について考察を行なった。牧民の婚姻と家族構成は、牧民の社会的関係や生産組織と関連するだけでなく、家畜の所有状況や草地のあり方と深い関係がある。定住によりもたらされた変容は、牧民の新たな社会関係や社会環境に原因があるが、それ以上に草地・家畜の所有および移動生活が定住により失われてしまったという事実が最大の要因であることを明らかにした。

第5章では、定住による牧民の就業構造(生業構造)の変容に基づいた経済的発展の度合い、牧民の生活意識および家族の労働分担における変容について考察した。定住は、経済的貧困の解消を一つの目的としているが、草地がなくなり市場経済下におかれた牧民の多くは、従来のような生業ができず、生計を立てるため低賃金の出稼ぎや日雇いを余儀なくされ、貧困という問題に直面した。また、従来の就業構造が崩れるとともに、食生活をはじめとする伝統的生活様式も崩れ、牧民のあいだに不満をつのらせていった。さらに、こうした現実において、男性牧民はやるべきことが見つからず、女性の方は逆に仕事の範囲がどんどん拡大する傾向にあることを明らかにした。

第6章では、これまでの各章の分析に基づいて、3つの村の文化変容の違いを比較しその要因を検証した。遊牧民の定住化によりもたらされた文化的変容は多様であり、かつ牧民の日常生活に深くかかわっている。こうした変容は、定住に伴って草地の利用が不可能になり、伝統的生業形態がなくなったことが原因となる。ただし、3つの村の比較から、それぞれ変容の程度が異なっており、その要因は定住タイプの差異にあること、しかも、草地が利用可能な環境にあればあるほど、文化変容の度合いが小さく、経済的にも牧民の生活意識においても満足度がより高くなりうることを明らかにした。

結論では、各章で明らかにした点を簡潔に整理した上で、遊牧民の定住化は、遊牧社会に多様な文化変容をもたらしてきたこと、そして、こうした変容の最大の要因は、定住化という生活形態における変化であるが、それは、あくまでも、草地の所有あるいは草地に基づいた移動生活・生産様式が存続するか否かに要因がある。さらに、2つ目の要因として挙げられるのが、定住タイプの違いに基づいた配置基準の差異である。いわば、配置の違いが、異なる文化変容を招来すると結論できる。

平成23年6月27日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 韓 霖

学位論文題目

「定住化」政策下における青海省チベット<sup>族</sup>遊牧社会の文化変容に関する考察

(A Study on Cultural Changes in a Qinghai Tibetan Nomadic Society under 'Settlement' Policy)

論文審査の概要

1. 論文の狙いと概要

本論文の目的は、「生態移民」と呼ばれる政府主導の移住政策による遊牧民の定住化が、彼らの生活文化にどのような影響を与えたのかということについて、中国青海省チベット族遊牧民を事例にその実態を分析し、牧民にとって何が重要であるかを提示することにある。

2. 論文の構成

論文全体は、序論と結論のほかに、6章から成る。序論は先行研究と本論文の位置づけ、第1章は、政府の移住政策、あるいは牧民にとっての「定住化」政策に関する考察、2章から5章はタイプの異なる3つの地域の事例研究で、これまで先行研究が少ない牧民社会の生活文化に焦点を当て、その変容の実態を記述分析する。6章は3つの定住地における文化変容の比較考察である。

第1章では、遊牧民の定住化とは何かという問題に焦点を当て、「生態移民」という政府の移住政策が、遊牧民にとっては「定住化」を意味し、その目的は、環境問題の解決と牧民の生活水準の向上にあるとされるが、その最終目標は、定住化による生業の転換などを通して、遊牧民の生活・生産様式の近代化と市場経済化の促進にあったことを指摘する。

第2章では、チベット族遊牧社会の伝統的な生産組織や社会的関係に焦点を当て、タイプの異なる3つの定住地（畜舎飼育のない定住村（A村）、畜舎飼育のある定住村（B村）、季節放牧と畜舎飼育のある半定住村（C村））の事例を提示し検証する。定住化前の牧民の社会的関係は、地縁あるいは血縁関係に基づく生産組織であり、草地をめぐる利害関係も多くみられたが、定住化後は、近隣・友人関係は相互扶助関係が生まれたことで好転したものの、家族・親族関係については2つの定住村（A村・B村）で出嫁ぎ等による親族・家族の離散・分散化により悪化する傾向にあると指摘する。

第3章では、3つの定住地における伝統的な家畜の生産技術や食生活の実態と変容に焦

点を当て、定住化前の家畜構成の維持および家畜群の生産技術は、定住化後は、2つの定住村（A村・B村）では従来の生産技術の消失に直面するが、草地での季節放牧が存在する半定住村（C村）では伝統的な生産技術が存続することを指摘する。また伝統的食生活も2つの定住村では家畜の喪失あるいは家畜構造の変容や草地での移動生活の喪失により従来の食の慣習の必要性が失われつつあると指摘する。

第4章では、チベット族遊牧民の社会関係の実態と変容、特に定住化に伴う婚姻儀式や家族構成の特徴と変容に焦点を当て、定住後、草地での生活様式の喪失と定住地での集住により牧民や子供の社会的関係が拡大し、通婚範囲が地域的に幅広くなる一方で、定住地での配偶者の選択も強まっていくという両極端の傾向を予測する。更に、補助金を多く獲得する手段としての家族や世帯の小規模化が3つの村に共通して見られる一方、2つの定住村では労働力の調達方法としての入り婿制度が無用あるいは困難になったと指摘する。

第5章では、就業構造の変容とそれに伴う経済的効果および女性牧民の労働分担の実態と変容に焦点をあて、2つの定住村は、補助金で生活する世帯が多く、収入や生活の満足度が低いのに対し、半定住のC村は、従来の生産様式が存続する上、畜舎や温室の利用により収入が増え、生活の満足度も高いこと、また、2つの定住村のうちで畜舎飼育のあるB村では、女性の労働負担の増加がみられるが、それは野菜栽培に加え、畜舎飼育の仕事までもが家事労働化したからだと指摘する。

第6章では、3つの定住地の文化変容の実態と要因について比較・整理し、3つのいずれの村においても文化変容は伝統的な生産組織や日常生活の様々な側面に及ぶが、その原因は、定住化により草地の利用が不可能になったことと、草地の利用方法の変化に基づいた移動生活の喪失と変容にあると指摘する。

結論として、3つの定住地における文化変容の要因は、定住化により草地の利用が不可能になったことや、従来と比べた草地の利用方法の変化にあり、草地での生産・生活の存続こそが牧民の願う生活文化の保証の前提であると結論づける。また、3つの定住地における文化変容の程度や文化変容の範囲の違いは、定住タイプと定住地の配置の違いにあり、草地利用と文化変容の範囲および伝統的な生産・生活様式と牧民の定住地での生活満足度は相関関係にあることを指摘する。

### 3. 本論文の評価すべき点

本論文の最も評価すべき点は、人類学的研究の根幹ともいえる現地調査による一次資料の精度の高さにある。序論において詳細に述べているように、青海省チベット族遊牧民に対する調査研究は、標高4千メートルの高地という地理的条件やチベット問題等により、同省出身の研究者でさえ困難を極めるが、韓霖氏はあらゆる人脈と方策を駆使して調査にこぎつけ、3回にわたり4か月近くを費やして、タイプの異なる3つの牧民の村で、延べ348戸の世帯を一軒一軒訪問して聞き取り調査を行なっている。調査資料が質量ともに優れていることは、本論文の詳細な記述からばかりでなく、審査委員との質疑応答においても十分に窺うことができた。その他の評価すべき点としては、中国側と日本側の先行研究の検討を徹底して行ない両者の違いと本論文の位置づけを明示していることから、論文構成や日常生活を包括的に捉えるという問題設定も適切であること、さらに、チベットにおける「生態移民」政策の下で3つの調査地域のヴァリエーションが提示され、その詳細な

比較分析から、草地利用の重要性という結論がきちんと導き出されていることなどが挙げられた。

#### 4. 問題点

審査委員会では多くの課題も指摘されたが、特に指摘されたのが、各章間の関連性の弱さであった。韓霖氏は、従来の遊牧地域の研究にはほとんど見られなかった、遊牧民の生活文化の変容について、その「全体像の解明」を目指したが、「全体像」の曖昧さという点に課題が集約される結果となった。その他、委員からは、本来「生態移民」という「移住」政策の下での定住化であるので、問題はむしろ「定住化」ではなく「移住」ではないのかという疑問が示され、それに対して、従来移動生活を行っていた牧民が移住先で「定住化」して生活を行なう中で生活文化がどのように変容したかという点に主眼があることを主張した。さらに、先行研究で、モンゴルと内モンゴルに関しては、両国の政治体制や政策、時代的違いが考慮されておらず、それが問題をわかりにくくしている点や、先行研究で示された論点が考察に必ずしも明確に議論されていない点なども課題として指摘された。

#### 5. 総合評価

以上、諸々の課題は残るが、従来の遊牧研究には見られなかった独自の問題設定と人類的な資料価値の高い事例の提示によって、遊牧研究に新たな知見を提示し、その研究の可能性の幅を広げることができた高く点は評価できる。

よって、博士論文の基準を十分に満たしていると判断する。

授与する博士学位 学術

論文審査結果  合 ・ 否

審査委員

主査 (氏名) 桑原季雄

副査 (氏名) 伊藤宏明

副査 (氏名) 馬津寿

副査 (氏名) 稲村隆也

副査 (氏名) 尾崎秀忠

平成23年6月27日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 韓 霖

学位論文題目

「定住化」政策下における青海省チベット<sup>族</sup>遊牧社会の文化変容に関する考察  
(A Study on Cultural Changes in a Qinghai Tibetan Nomadic Society under 'Settlement' Policy)

最終試験の概要

学位(博士)論文に関する最終試験を平成23年6月25日に行い、申請者による学位申請論文の内容説明の後、下記5名の審査委員から論文内容についての質疑と、申請者による応答を行った。

申請者の論文は、「生態移民」と呼ばれる政府主導の遊牧民の「定住化」政策が、遊牧民の生活文化にどのような影響を与えたのかということについて、中国青海省チベット族遊牧民社会の複数の事例の実態を比較考察したものである。

最終試験では、まず、先行研究において日本側と中国側の文献の渉猟が詳細かつ十分に なされており、論文の位置づけや問題設定も妥当なものと評価された。また、最も高い評価を得たのが、高山病の危険<sup>あり</sup>、かつ政治的にも調査が非常に困難な地域で3回、約4ヶ月にわたって、申請者が3つの村で行なった現地調査により得られた、質量ともに優れた一次資料の人類学的価値であった。

その一方で、なぜ「移住」より「定住化」が重要なのかといった点や、各章と章の連関性が分かりにくい点、先行研究で指摘した論点が考察の中で十分に議論されていない点、さらに論文中に中国的表現や厳密性を欠いた表現、説明不足の箇所等について質問がなされたが、これらに対しては一定の水準を満たす回答が得られた。

以上により、博士の学位を与えるに十分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

最終試験結果  合格  不合格

試験委員

主査 (氏名) 桑原季雄

副査 (氏名) 伊藤宏明

副査 (氏名) 高埜孝

副査 (氏名) 稲村哲也

副査 (氏名) 尾崎孝宏